

第2章 時代の変革、将来的な変化要因

第1節 高速道路をとりまく情勢

山陰地方の東西を結ぶ高速道路網として、山陰自動車道斐川インターから出雲インター(神西)間 [13.6km] が、平成21年(2009)11月28日に開通したことで、中海・宍道湖圏域が高速道でつながり、所要時間の短縮はもとより、産業や観光振興、救急医療への貢献など大きな効果が期待される。

しかしながら、市街地(大津、今市、塩冶)から斐川、出雲の両インターまで離れているため、市街地に近い場所にスマートインターチェンジの設置が望まれる。

また、人口集積地域(大津、今市、塩冶、高松、四絡、川跡など)の住民の多くは、直近の斐川インターを利用すると考えられるため、斐川インターまでの道路利用の整備を図ることが重要である。

出雲以西の未着手区間についても、国の政策転換 [民主党政権] により公共事業費の予算は削減方向に進んでいるが、引き続き切れ目のない経済対策を実施し、高速道路の整備を最重点に、地域の安全、安心を支える道路ネットワークの早期構築が必要である。

第2節 少子高齢化の進行

時代の潮流であり、今後も進行する。労働力不足や経済の停滞、社会全体の活力の低下、地域における人間関係の希薄化や地域活力の低下につながることで懸念されるなど大きな社会問題として深刻な事態に至ると考えられる。

アンケート結果では、暮らしに不安を持っていることの1位は少子高齢化である。高齢化率25.93%、出生率1.05%という大津地区の実態を踏まえ、子育て、教育、医療、高齢者介護、障がい者福祉の充実等、国の政策に反映しうる制度改革に向けて、住民の声を一層高めていかなければならない。

第1項 少子化

核家族化、地域の連帯感の希薄化、女性の就労増大、保育需要の多様化、生活スタイルの変化などにより、子どもや家庭を取り巻く環境が大きく変化し、少子化が進んでいる。

大津地区の15歳未満の人口は、平成12年(2000)は1,629人だったが、10年後の平成22年(2010)は1,378人と251人(15%)も減っている。子どもの人口割合も16.3%から14.7%に減少するなど、少子化に歯止めがかからない状況が続いている。

子どもを安心して産み、子育てに夢や喜びを感じることでまちづくりに重要である。このことを推進するためには、豊かな自然環境や地域で受け継がれる伝統文化や赤ちゃん訪

間、地域活動をしている人材活用など、地域の社会資源を十分取り入れた活動が必要である。

第2項 高齢化

高度経済成長を支えてきた団塊の世代が定年退職の時期を迎え、高齢者世代の仲間入りが目前になった。今後10年足らずの間に大津はますます、高齢化社会へ進んでいく。

核家族社会のあおりから、高齢者一人もしくは夫婦二人暮らしは875世帯で、高齢者だけの世帯が半数以上をしめている。また、世帯構成員の少人数化が進み、家族内でも孤立し、家族内の助け合いが乏しくなるなど、「家族」の在り方がますます変容しつつある。

住みよい大津のまちづくりは、高齢化社会を基本軸に考え、高齢者の求めに着眼して行うことが、生きがいと住み良さへの近道といえる。

大津は人口9,362人、世帯3,453で、65歳以上の高齢者が2,428人、高齢者世帯が1,685世帯、高齢化率は4人に1人の25.93%をしめる。その流れはますます顕著になり、10年前に比較すると4.0ポイントも増えている。

ほとんどの家庭では、高齢者に健康上の問題が発生したときの備えをしていない。また、治安や災害はいざというときの備えを最も必要とするが、町内の緊急避難施設の周知や防災、防犯意識も薄いのが現状といえる。

民生児童委員19名と社会福祉協議会を中心に福祉のまちづくりを援助しているボランティア団体は数多くあるが、ますます増える独居高齢者の安否確認、見守りなど負担が増大している。

医療面、健康面は、普段から個々に意識をして、高齢者向けの健康教室、健康診断への積極的な参加呼び掛けにより、病気の早期発見や健康を守る意識は強いと思われる。

反面、時間的に余裕のある高齢者が増え、高齢者自身が生涯学習を求める意識が高まっている。また、子育て支援、文化・伝統・芸能の伝承、しきたり・風習・ものづくりを子どもや若い世代に教えるなど社会活動への参画が期待できる。

第3節 地域力の低下

第1項 経済環境の悪化

女性の労働力が期待されるようになり、今後ますます女性の社会進出が拡大していく。非正規雇用の増加、子育て世代(若年層)の雇用情勢の悪化など生活の基盤が安定しないなど雇用環境に変化が見られる。

第2項 生活環境の変化

単親家庭の増加、外国人労働者の増加など、多様化が広がる傾向にある。

アパート・マンションが増え、住民の流動、個人主義的な傾向が高まり、「ご近所付き

合い」的な関係が希薄化する傾向にある。

情報収集は、年代により、紙媒体でなければならない人、インターネットから求める人など多様化が進む。

インターネットやテレビで簡単に情報収集が可能な時代となり、若年層の「個人化」が進み、生涯学習の場への若年層の参加は減少していく。また、人と関わることを避ける傾向が強くなり、地域行事への若年層の参加は少なくなると懸念される。

反面、高齢者社会の多種の不安要因から、改めて人と人の関わりの大切さ、家族の絆、助け合う心が大切だと考える人が増える。

第3項 町内会加入率の低下

平成11年(1999)は77.5%にあたる2,559世帯が加入していたが、年々緩やかに減少し、10年後の平成21年(2009)は、2,360世帯69.4%の加入にとどまっている。

要因として、高齢化の進行、アパート・マンションへの入居などが考えられる。地区で行う川・溝の清掃作業、町民体育大会への参加などに影響が出ている地域がある。

第4節 出雲市と斐川町の合併

平成23年(2011)10月の合併が決定した。斐川町は、出雲空港、山陰高速道斐川インター、工場出荷額県下一の工業団地、荒神谷遺跡などがある。斐川町は、斐伊川をはさんだ対岸にあたり、大津地区とは3橋で結ばれた東の隣接地区となる。

買物、医療などの生活面は基より、産業や観光など多方面にわたって協働することで、経済・スポーツ・文化や人の交流面などからも地区の発展が期待出来る。